

(補足資料 26.3.11)

「宣教と適応」

26.3.11

「グローバル

ミッションの近世」、名古屋大学出版会

『新カトリック大事典』によれば、「適応」は「カトリック教会で、福音の本質を変えることなく、時代、場所、異なった文化のなかで、福音の表現を変え、そのより深い理解、受容を目指すこと」と、定義される。福音の本質を伝えるために、現地の宗教・言語・礼儀作法を徹底して学び、現地人との信頼関係を築き上げ、宣教の土壌を養う—このように理解するならば、現代の我々にとって、「適応」はいわゆる“宗教原理主義”とはおよそ対極にあり、宗教的対話の理想的態度にも思える。・・・

一方で、このような「適応」のイメージは、ともすると“理性的な日本人と高度な日本文化に対する敬意、異文化への相対的視点”等と言った言説に還元されかねない。本章では「適応」がそのような崇高かつアプリアリな理念としてでな異教徒の改宗という目的のための、手段の実践課程として生まれたのであることを今一度想起したい。・・・

さらに「適応」を正当化するヴァリニャーノのレトリックが、新旧対立の最中にあるカトリック教会の存在を正当化するレトリックに「適応」していくという、「適応」の別次元での構造を指摘する。そして、「適応」の素地として見出された日本人の「理性」的性質に具体的に「適応」した例として、彼の『カテキズモ』を取り上げ、そこで披露された「キリスト教の正しさの理性的な証明」に潜在する問題点を、同時代のヨーロッパの思想的背景を参照しつつ明らかにする。そうじて本章によって、第二バチカン公会議で称揚された「インカルチュレーション」の名のもとに語られてきたヴァリニャーノの宣教政策を、歴史的背景から再考する一助としたい。(132-133頁)

メモ (12) 5. The How of Inculturation

: *A Handbook on Inculturation*

Peter Schineller, S.J.

The process of inculturation.

All ministry involves the principles and attitudes of inculturation. Wherever one is, one tries to stir up the gospel values that already present and bring to bear

メモ (10) 2 日本文化のなかの聖書語

鈴木範久^{のりひさ}：日本の聖書語 翻訳の歴史、岩波書店 2006

文学作品名にみる聖書語

「日本語として殆どなじみのなかった言葉が、キリスト教と聖書の普及とともに、次第に日本語の仲間入りをした。それも、聖書の中国訳から振り返ると、実はかなり多くの言葉が、すでに中国で使われていた事実がある。すなわち日本語の聖書語は中国起源ということもできる。それが、日本語として定着したのである。キリスト教の受容が従来あった日本語を変化させているとしたなら、これまた大きな文化的影響とみてよい。なかでも「神」と「愛」の言葉は、当初は日本人キリスト教伝道者や信徒をおおいに悩ませる訳語であった。しかし、キリスト教をはじめとする英米文化の波が押し寄せるなかで使用されるに従い、次第に従来の日本語の意味を変貌させ、語義自体をキリスト教化させるに至った。

石川達三の『風にそよぐ葦』は、マタイ 11:7 に見られる。

島尾敏雄の『死の棘』は、一コリント 15:26 に由来する。

大江健三郎の『洪水はわが魂のおよび』は、ヨナ 2:5 から来ている。

日本語になった聖書語

世の人を救済する福音をもたらした人が、キリストであり「救世主」である。普通的名詞の「救世主」を、原語でキリストといったのが、イエスの固有名詞になった。

日本語を変えた聖書語

日本語に従来あった言葉が、キリスト教もしくは聖書の言葉として用いられることによって、以前の語に別の意味内容が加えられ、膨らませられる例がる。

「慰め」なぐせめること。また、そのもの。人の心をなごやかに静ませるもの。また、キリスト教では、悲しみや苦しみにある者、弱い者を神が励ますことをいう。(199頁)